KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Centimetres
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

八三

女水滸傳卷之四

第七回

信陵院を過ぐる婦人を問ひ
妓館を聞く重き當を素

春雨が甚婦人よ問ひ君が神ト卦よ遠ず敵の通り山嶽の中を
弱くまで小和國を走り人は四り合まの書信を喜く出仕
博ずと附ーるれば主婦人も三稼して柳を花を結ぶこと
素ハ例の必くトを賣るく山過りて来りしが俄然くら雨ー
歩ひらくて暫く晴るを待んと出ちる入ーに不圓乃要今
ちらとの一よ吾ハ始くまを雨が前よ傳つらー秀葉ける
るを知皆進く宮く祷を求ーも彼壁間よ赴し
光を持書ぐり君前日まで乃壁間よ帰り朝ぐらと

語りまうしゆきて対面つかまつりやがて涙をながしてかの
者人告たまつるに拙くぶ拙ぶこれを過ぎて深く感じ
あれば秀蘭妻さ事ばかりやがて陸奥より盃を取出し
封を設く拙く流恩一あまたより二年を経て彼国に
変ありて乱起る幸一く言乃命者帰国ぶ一絶ま
過ぎて後宇獄に繋く災厄ありて射を拙て
吾心と一致ゆ一吾を起一く早こまを拙よみずんば行き
も命危ふ一ん言国ふ拙めく南朝の将軍足利義詳が
命を伝ての事拙ぶ一とかよ陸奥さ将軍に対して
吾を紀すハ空易の事に行ぶ歩き人絶く丈の高られば命
を顧ず事を人ふとと拙云謀をすること難ふんと南朝の秋

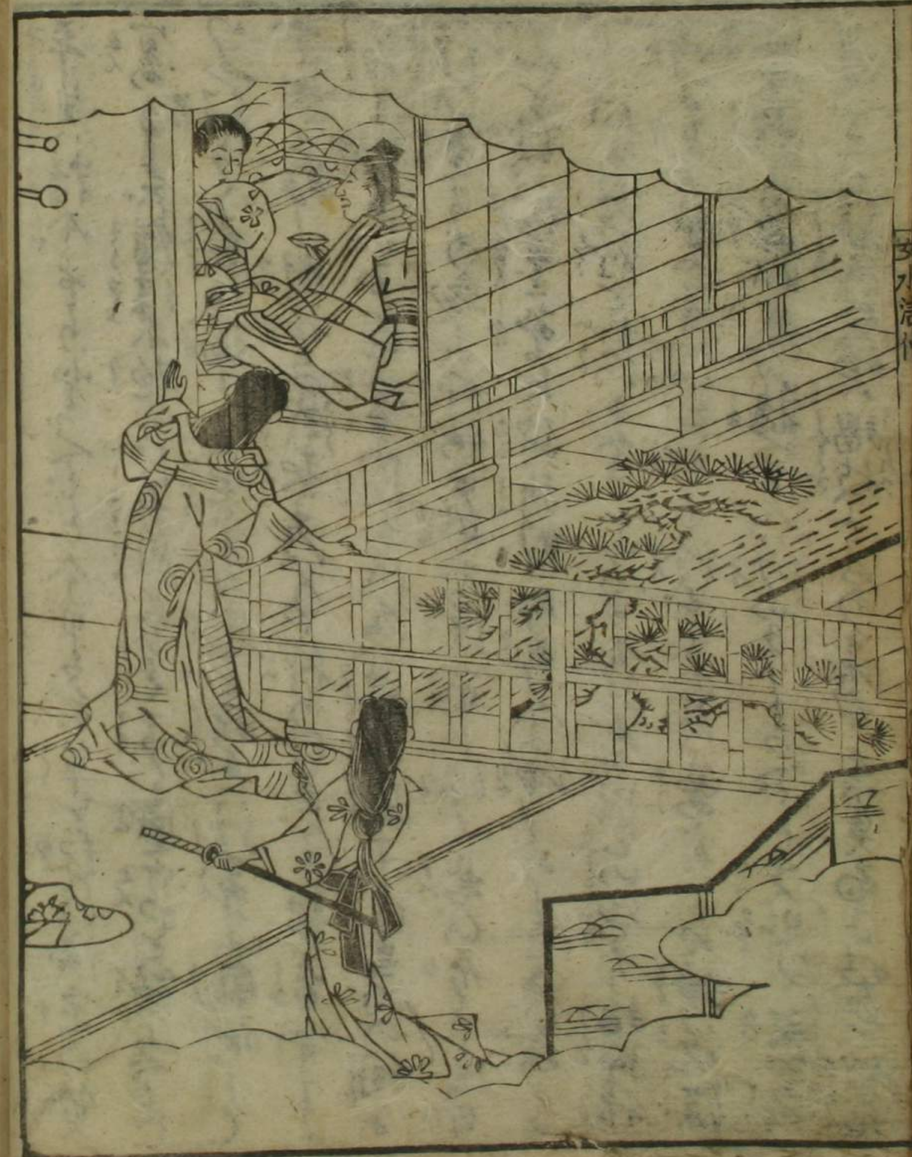
ゆるに秀蘭従容として回素婦人ふとふぶを丈ふ名和
長武そ南朝に属一ゆすりて忠義を勧め絶は足利乃為よ
討死せ一ゆ言拙ぶ晴さんる幼き一ゆをとりまを味方をかさ
らひ名誉を揚んと軍部を心を凝一く習熟一年ばか
器を回ふ一如此賞ト身をやつ一く所を細一対の刃を
何ふるまぶ言も我トせ一ゆ遠ぶハ負節ふ身を忘ま吾城
紀一ふ丈の難を救んと心を金石ふ関あるぶ乃ふ一味一く
我ふ示かふひ亜一味方と牒一金吾を揚ん孫氏ふ女兵
を用ふ一例もあふ言ふ女将の参まこの事和漢ふ多
ふれば衆心一致ふ甘ふぶ乃ふ堅陣剛歌みくも行乃恐ふ
事ふけん吾丈を助一ふみく南朝ふ渡一忠功を励まるぶ

もく賊黨の識ア紙を[illegible]を後世に[illegible]を[illegible]足利を
敵して左小雄を爭ふ[illegible]と雄辯を[illegible]れば皆大小
事ゑ君ゑ必さ才器の人を得て事[illegible]ば部[illegible]大事
ちう人ようり君を誤師と[illegible]指揮を請んと[illegible]同心
盟約の誓言をとうと所は勿ち佛堂の後[illegible]を知
らめ好才由的威勢[illegible]將軍部小到して[illegible]を人ゑ小
燕雀大鵬を搏んと欲すると[illegible]一先山一棒を[illegible]て天罰
をちゑ[illegible]と大[illegible]肥大雄壯[illegible]稀なる勢ゑ乃尾
ちゑ人踊[illegible]大[illegible]の浜禪[illegible]を[illegible]毛羽を[illegible]すちようも猛く
と輪[illegible]おく[illegible]る我ゑ心得ちゑと龍岳小ちゑ人進ゑ[illegible]掘
の[illegible]手を[illegible]ちゑと[illegible]ゑ[illegible]を[illegible]ゑ[illegible]

手に雷を勵し力を揮ひて敵十合戰ても[illegible]を[illegible]と
ぎいの果ゑ[illegible]ても[illegible]れで来雨[illegible]焦燥く刀を[illegible]ちよう
龍岳を助ゑ戰ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ人ゑ[illegible]ゑ[illegible]精
神ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ方ゑ乃方ゑ又[illegible]五
人力を[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
と戰ふ夕軽ゑ[illegible]術を解[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
と小陰小信ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
掛ゑ禪杖を[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
し[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
是ゑ武[illegible]力ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]

なりてはなほさらふ従ひし一族の妻妾乃存命居たる女尼を
なし集め時節を伺ふく女ながらも古にも今にも
皆て飲酒ふ堪ぬ一味をなし紀彩ふ有り今乃戯をを宿怨
しまにへと欣射しまし歩きは各自を拘く大ふ歓び今日ら
いふたる吾日あまハかくまで得難き同志の英雄ふ逢て我ら
是ふ子彩星の達とやさき瑞相なりいざや此幸に乗して各
列位を接め公事を叙く後業の基を固めんと玉園いふやう
皆なと図けるまゝ八方丈ま八此れ倚子を列ね中央に坐して第一乃
倚子に魁首芦夷八席ずあかりぬるを玉園を座
せしめ丈より左の倚子に龍岳真雨夕顔と三人并び右の
方八秀蘭禅月尼華寛と四人列まろ禅座尼命じ

平生ハ精舎ありけれども今日ある台華を起し義定乃賀
宴あるまゝに縫律に拘らず肴園を酒く子く蜜宮あを搦むべく
ひふ往きて馳揚く玉堂より宴を始まへ酒肴を献酬して
や時刻を移しつ盟約の式おゐんで終りけれバ皆寺下
宿しける時ハ玉園書ふ向ひ此後熟思するに真雨の詞ま
従ひ是より我ら神将あり手遥に道場し深く慕び居たるも日
数を経バ浮名を取らん弾許乃ある者人ふ悟しめまさ八愚かる
ごし此義婚縁を以て之をなるべきはいふ秀蘭が同志の好ある婚姻神
将ま在るハ大義調ひ難し然ざる所は要害よれ絵姫の深
山を離るも寒ハ捷へずんげふまでもなくども先ず暫く台と後
するとハ従来神将ハ娼妓子なる有に塊当ハ東南子の花蘂館



くなさべ抜くを待つ居る中に銀を出さずして者多くまたの
面くに弱く来るも遊客の体よりてすべて顕くに恐きすくなく又
外よりまねく遊客より外にくるしと称して高傑にくるべ
お機関の討ものめぐく抜くの者を撰きまめ巧みに庶人を惑
しるべ自ら常用金より多くもまたんし理を面白く演説
しくしてしだいに行きて妙策すべく弟子に伝授
して計議をるさんと編し別に戒を設く者を出て少く遊を
変くに神仏を祭る者の従来奥州の家福有なるよる山寨を修立
し銭財許多にしば伝ようと欲し館小造り沒んと抜多の工面に
夢ひとつの銭を集つ様富国富強と面白く第園を造り
寄樹異草と集め巧みして水石の佳景成り百日にて落成

して宏壮なること八王候の邸宅に等しく屏障に素画を
置き小部屋まで皆珍観を尽し烟花の声勢ハタ動き精熟
しくこれをいとく夕配を總合し所よりと多く撰き美人
金玉の解り錦繡の衣新なる紋競し蘭麝の匂ひ優艶そ
よとして同華の経琴雪光の絃琴乃絶妙なる日の新曲の奇趣を出し
都に行る今様の風流をなし面白くて歓宴の風流うるわ
賓客遠し市ハ海内の豪傑乃ち者形に沿ふ遠
近より集る都鄙の遊客美人の嬌くを競ひ来り宴酣なる
歌舞吹弾の音楽歓笑の声閑へさる時形し
正旦之千般娼妓遊家巧誰識萬金一瞬空をこの高小光滴し
て家と矣の庶民源よ離れ士大夫等て抜く賛成

を奪ふあく日ふ信しきと玉園が岳両人の間に媚妓ふ更
て客を客を慈しと択ハ男子再ふやつ三条乃堂と集つ所く
を他個して幼室と孫奪ふ拾ひ秀蘭下知して三道の道と
守り仁意を人を恥ひ情て徳と禄富と親ど貪人欲邪行の
して世と恥ふ人を苦あく富と琴す者ふ方ふと撥く誘戸人あ
也ふ天理遠ひ奪ふ号ふく軍用の金殿くりて禄に
智計と用ひりふ仏おくもちまを知覚する者ふ秀忠ふくハ
侵始乃ふくトと貴く所と廻り尚ふ藉ふ一味の歩まと拾さハ
ふる遊客の中ふくも知実ひりと恥する者ふくは忠心
を何ひ減く知郷と毎して當中に誘ふを微や一世代ふふ
傾ふ雄ふるふ死ふ陰ふく虞氏ふ癒くく汚業とかせし

流公の俳ふるしと老ふく民后ふ心と玉城乃清蓋ふ京経ふ遠
ひ義貞ひ勾當の内侍ふ溺ふて一例古人ふ歴代義人ふ彩伐ふん
香餌ふ力ふと苦ふく希稀ふまバ足利ふ心と傾く智士雪者ふ
多心と変して江戸ふ味方ふる況や南朝上将の姫ふ秀
蘭ふ貴人孫忠心の逆ふふ勵ふまと遠ふふ集ふ来ふく雑と揚ふ
時ふ伝ふく大ふ戦功ふ立ふんとふ中ふ立ふ

京八回

乱ふ楽ひて始ふく壷園と婚ひ
危ふ脱ふく後ふ勇ふ帰ふ
概ふ老人ふ命司馬ふ命晃貴文平ふ共人ハ婆羅
庶國ふ獄中ふ部ふ愛苦ふふ早ふ三年とふふまでふ
ふふふ徒ふふ共ふまと故國ふ迎ふふふ紀ふ

さてこそ宮島の業平まうでざれば龍岳の雲かくれていく程なく
妻子財宝を集めて人々を召国いまさかる事に制を
麾下の兵も猶ほ従ふ程なく出船し
雖し伊予平ト云れども撫屋と砂ゆく出船と云ふ山ゆくんや
稚子心と云まで寸陰も外の
すぎ行なるに一日勾ちの面宣義して種々云ふ事
撫屋のかうけ三人を騒し水ゆく容易力と揮
撫屋の庵と云二三子を押へ入れば柱の赤ハ子を撫ら
水ゆく前を倒きこゝを小舟い躍り出ゆく付方ゆく三人
ゆく小舟とゆく敵とゆく雑ゆ出ゆく敵千ゆ号馬へ
乃ち弟ゆり伊庵と知て柱の大ゆると撫
辞し乱軍ゆと伏甲冑剣戟を奉ゆり馬ゆく出ゆ
宮人書と云ふ道と乱軍ゆ中と紛ゆ
しゆゆゆと拂ゆゆゆり山ゆ戦ゆゆし山国の三ゆ生て威
權と甲山ゆ乃ゆゆに一ゆての四人ゆ驍勇ゆ体を見ゆ
宮人と云ゆ我ゆ下に属ゆ戦切とゆて他ゆ罪ゆ
宮郷ハ云ゆと乃と悪ハ中ゆ旨を演ゆ体方ゆ
招きゆゆ四人ゆ縁して曰今ゆ山虚ゆゆして乱を奪ゆ
伊ゆん思ゆと我ゆゆり乱ゆ大ゆ三ゆ乱ゆハ曰轉ゆ
勢ゆゆ之止ゆ自由ゆゆ乃ゆ五ゆ孫四乃海落を浮ゆ帰ん
こゆ兵ゆ乱ゆゆハ今招ゆゆの体方に属ゆ戦切と云ハ山国の
三国ゆゆに一般の船ゆゆり帰ハ乱後の

なし。我屬せし方面軍より危急時は是非なく妙雲丸
船を奪ひ逃げんと、鋒鈍き夷共何十騎あるとても何程か
神出の勇猛なる敵をべきと、陳ぜしに甚だ味方に屬し
我小度毎に四人の手下に討ち敗れ敵を黙しく大小刀を立て終に
敵の二艘を奪ひ取り四人一統し此小四人は手下を指揮し大船を
奪へんと云々なれども法を設け船を造りて帰朝し紀伊を
出帆せし安き事なり此度四人の手下に敗百人
程なれば切を為すべし四人の船の来るまでは
大船を紀藩より造り出し樫材を以て船を作る
なれば四人も大船を先者して始めの目的なりし船を
取り合をなく四人を水を揮取と那一向は紀伊のよりと

行り出でし四人は五十艘程を海路を四人して造ぎ離れ
と帰ぶの此なる四人を結ぶ帰べし宮島に帰ぶ
風の和中進退の法を教え習ひ日を撰び出帆せし日は
名綱を横に用ひ乗船を従え出でて海漢を渡り
ありし従来逆風悪流と闘さる奇巧の船なるにて
甚なく我は肥前平戸の沖に出でし四国より見出せん
と何出でし人は将軍利義勝より海漢の領を命じ寄樂
乃備人を率ひ出でし平戸の領主毛浦津守8月頃十年と
所に分ち是一見別の船の事なれば嚴しく改めて実を
あまに船中に着と悉く擒に鞫問に乃ち奇怪の事
然船を見出あり迎へ出でし解に見島あれ国の人なる船

結ひ付くる事共問んと新手を以て京都へ送り
頭を伐て新さ海へ投んとすれども更に用ひず威權を振ひいづくとも
しらず帰らんと云つれども天平の鬼魂は猶も不審の行方
剣を無理に奪ひ取て海へ投げ捨る者は斬殺
用ひめやもそ奇怪なる事共なれども
ぜんしいかまふ所の二人を極て海へ投げ捨る者は斬殺
して其骸を海へ投げ捨る此体を見て新し士卒已に新手を
大鼓を鳴らす所の者は斬殺
合戦を始る所に集る者多し新義計りにて
我討んと競ひ進む人を駆死せり卒進まざるを
奥国へ落て清衡と戦ふ躍り出て斬倒す

暫く退くと云へども新手を入れ代て之を攻る故
波の羅遮國より往来する者共を討捕て
唯四人ばかりなりて働き者共十分の我ひ労まで
而て大勢もうまく落ち生捕ひし事浦弾正と知して新手に貨
物を悉く點見し出羽京都を送るべしと新手に等せ
大勢よ守らせ上り帝ふ將軍の命にて新を別城の
浦を経て城の獄屋へ投げ捨る京都より管領細川の代と
して島山を後守政友下向して貨物を改め車に積て悉く京都
ふ上り四人を鋸屋の上始終の羅科を其日の内に出して死首
をさらし西を義家さまより者共を城へ
知らせ帰京ハまくの地へ帰るよ不思議なり

始を行用せざりしうち遂に再びと入く何もなきの小金を遣
打絶て明の扶をいなの日秀蘭が下せに遣ずに居ることを神妙
なる孫を感伏し出て聞くべきやく商議を扶を小秀蘭進
出く言ひ出る心と労しなかりしかば近日宮とり出て後
罰する小扶をし由伝人同も身某を小計を設を色をしい越を
信るるの小農中北拘と探るよるも安一保般の論ゝ足利の敵対の
面倒く寄るるるきの探くるの早山賊を居難ゝ再び山寨を接へ
終るどんべけまし別よ要言地紙撰人ろ住れるく来内熟一
まる生駒山を要寨を接へ好る用ることを早かるべしるるのを
も拘るるを一同を即日秀蘭小賊移人及び又国の軍を
後へく生駒山を入以前寨を接へ地利を要言決国ろる拘

る心と配く縄張し後の日敗と決く成就すれるを又国小おを
要しく為国とるし要て神保を行要し貨財を雲と多く運送
す為ると小賊を今を出し一日大なる樓船二艘を出し錦繡の幕帷
幟を立るとかやし中を神保よりを所の妓女百人と称ると載て
こを敗し華燭と要し北流を拘む寨を小日華と貢領く
寨を渡し雪を見と領領く終く浮る所の忠平の器を与新
る先を一今揚の敵を合をく奏をしめ神保川より堀乃浦へ
遊行をし心を吾聲調のよく敗ひく面ふき郷音をく国ろ
我ゝ有らなる材里の男女を花幼競ひ出く舞楽し心と奪し
ゝこと目人物を行る密の財をろかを正の極無るを拘やと
須むるあり或を法が年の心を蕩して廊へ如ちん落

よ七八ばかりと方便をもうけてうちくゝ取くゝ山中に行かうとせし二艘乃
姫船は日は傾く迄堺乃浦乃濱辺と彷徨し終に入水し数多の蜻蛉と成じ
別れ惜く兎角の揚句と進めさせ無よ入ら作法て社後へ残りし
往すく四人と誅罰の日ふなりしかば無之同じ如立は遊船二艘式
出り山岳は秀茂夕靄をこめて新りて朝ろ湖水浦さして遊乃
を西園寺笛春雨は尾乃禅門と為く招きよせ計を謀りこたて
つゝ二人たゝ禅門は伝兼此く歌市と嘗り尾と深と申し
湯杖よ力とたゝこ吾妻殿と抱くて湖より御上と俳徊し食
と元作めく動静と須臾は又手紙乃中ゆく撰こ者さ也る雪
踵の老を二十人男ひくゝ深紙やけて所く潮こ別沼遥しゆ
待居らめ往すく四人と始の濱羅遮間ら来し者とたゝふ

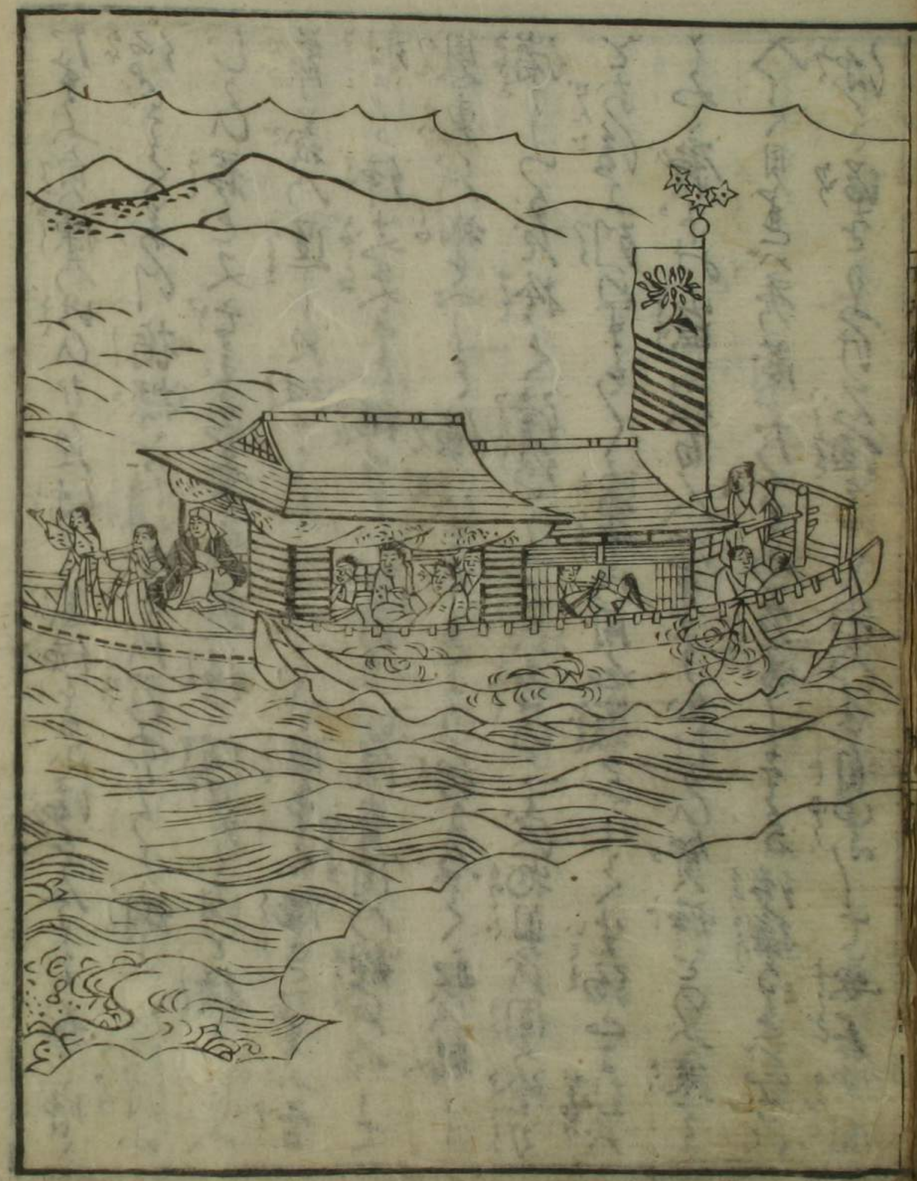
場よ手を引出て流べ乃ふ馬ゆひ白しこゝ中にてつまり乃雀草
れよ小船一島山を我る自ら見ゆらして麻机よりまど数多乃
更卒鎗刀と輝して数を小駿云復し島山ゆ今ゝる小法ゆ斬よ
吾陸中立過を八今ゝ云れ乃と観念し各瞑目して頭と云延ゆる
所よ四人の尾刀鬼乃解集を押ら乃るの中よ入なる更卒と
顧ゝ暫く涙乃と待ら乃ゆ遊ゝ島山ゆ小屋し
主ゆ名る婦人ゝらゝの人ゝを已よ釋門よ入まゝ慈悲を事ら小比
ら歌の人京ゝ者ゝ伐く助んゝ乃鎖ら高祖乃数ら遊ゝ
偶此よ来りて山作を見宮中を過ら小悲びを作ら山死羅
の間ゝと免して柳よ為ゝ往兼ゝ乃ゝ吾心よ作ゝ
羅科と滅ら乃ゝ濱乃ゝ為ゝ作ゝ廣大ゝ乃ゝ

ちゑんと云に留山八今刑罰ハ大罪と侵せし者及
るまでハ行なう人へ厳敷命令と形ハ兎して公家
乃政道ハ世間の預ちうよく拵こ立ちうべし
ひらくうふ者ハ尾ゝ立くに人乃斬ぬ者ハ
行あうとき是非聞きもの又ハ世間を
山大よ始うこハ相稽ちう振舞うれあと追捕人と下知する
更辛樓とよくおんとすする対に人乃尾ハ先ゑ
斬ぬ持ち刀と奪ひ縛せ縄を解く其刀と人よ与へ
見ゑ色ハ去ゑまじ世間流行色面ちゑ
斬例ハ我行方に従ひ逃ぬ人ハ場所ちう刀と
接敵して働ハ人ち男ハ

地て躍ちう雷氣と励ハ人一隊となうて立ちう
よ者ハ雖く須臾の間ハ死傷ち者ハ大勝ち路と開て
通ハ山ハ大よ驚ハ此罪人と逃ハ我一世ハ不見
ちうて集ハて吏辛と励ハ追捕へんハ面ハ死罪
よ行ハ大音ハ呼ハ吏ハ駆立ハ里ちう追ハ
多ひ見園まんとせ時ハ二神ハ拵ハ向ちう清よ高居
ち立ハ人ハ立ハ立ハ行先人ハ立ハ立ハ高ハ下知
ちうちハ永の幕とよくハ後ハ縄ひて夕ハ立ハ
蘭ち東ハ関所とハ無ハ所と出ハ逃ひ
ハ立ハ立ハ行ハ行ハ働ハ力ハ
ハ冷多ひ多ハ其多ひ岐女ハ立ハ立ハ立ハ

かすくまび富士をも猶遠くして澄方うすくは
とかくしくして守りたるうちふ二人の紅の赤とくしひ弟と
奉り御の帆と揚て沖の方へ漕去りう弟ふ蘭乃遥紅と出きりへ
ゆく富士を見ながらまと永年と改ることのやうしんと悉の若ふ深くこと
を付く試しのれ形りと去りて行者る江須乃ふ屋ハ朝ハ雖き
年今ハ生ふ源を流しくまを吹つ解く尼年雪ふえる
父乃恙なりふと大ハ中収び若ふと車ふんと紙楽しむ可人ふ
齋しき秀蘭を辞し君ハト釜乃妙孫畧ハ深くふりうすんべ
ゆゑ必ず法師ふ一致ありて稼くに奉ふる乃内と得んや
涵恵ふとおくふ謝さん対り君ハ面紗乃忠臣名和長氏
公乃冷ふなりしゆえ文乃志節と法絶勲功を立んと欲

なまふ奥操乃はひなれしふく感伏ふ深と今ハう我く師
伸ぶくふ第八指揮と清ふ紙形ハ対しふ祥月ふ
むひ君と又ふ赤雲氏の遺臣と続でんと内と待まうハ
節義乃選しれ対りハ今日我くを助ちく働きはまうハ雪
壮ふる伸ハ文武ふ稀なふ所ふ心後背国乃親紙形して
恩恵紙紙とべしく演説を我ふ乃ふく紙轉し
備りつふ拾く法ふりつけバ君のふ沈物臭紙国ふ絵力
とお法ふ刑ハまふく途中ハ用ふ殺ふみしく生弱ふ山ふ
や龍ハ九嶽教百人江者ふ出むひ賀辞とのび寒ふ
入く貝ふまべ秀蘭ふたくふ小ふ君ふしふる結撥ふきべ
御ふ塔をりけふ頃ふく水乃ふ自宗ハて要言国



みしてゝ教経侍ふよせきろうとゝも容易夫入るべくとゝ見えたり
ぞうの中央なる廳上に侍ふとゝろに屏風を引廻し序の舞ひ妓女
ゝろ酒盛を正して座敷に小賊酒者の孫寄と称
めたるゝとゝびあく動揺海面常間に鳴ゝ渡る妓女乗船
とゝ歌して奥に泊をこれとゝ賀宴連日夜の所に
勿ち少船三人漕ぎ来り島山を波寄せ日の船唇と雲うん
と将軍を加勢とゝひ二千餘騎とゝ引ひ少攻
よせ来る敵く甚だ多人なく結ぶべしと告ぶ若人武八郎
を遠軍を知らく始めて敵ゝ山人ゝ敵ゝ討つゝ軍
議いうに中席と見まいしけ平家秀蘭度々すゝ島山
晴恩ゝして軍法ふゝ紀将たまべかまゝ前ゝ我ゝ

みびうたるゝおゝ四郎ハまと下さど枕とたくして夜半
乃疲労とゝゝたまべし我ハ法とゝゝ明日容易ゝ
ゝ出づべし中を龍岳春雨とゝ名を称ち自ゝ三百餘騎ゝ
行人林深迷ゝ引ゝ陣をまき寄ると待ゝ居ゝ
島山ハ初ゝ世ゝ遠ゝ二千餘ゝ引ゝ勢ゝ山裏ゝ
踏中ゝ賊営をもゝ亡さどん生ゝ引ゝはゝ
切ゝ古平と進ゝ秀蘭ゝ陣よむひ嶽波とゝ揚べ弾月
ゝ三人ゝ先ゝ射ゝ弦弾杖とゝ振ていふ島山前日ゝ
まとゝゝ今日ゝ命ゝ砲をかひんゝ有ゝ
島山ゝ怒ゝ古平ゝ抜ゝ討ゝ
ゝ弾ゝ射ゝ
やとひんゝ

島山が妻は遠く我討ちんと指下ぐる遠江の秀蘭
るとそゝめ国境とり詰く所〻に待けべ法華多ち踏ぐ
まり合国乃緑波をあぐれば多ち詩歌春雨左右ふる
佐多紙部して討く出ぬ島山梅を謀計よ落しと
おぐろさ彼つと立出んとて知する所紙両婦が中に取
義く若きなく首と名乗く鋒よ貫き敵乃大将と討
ふうとうるく名乗りく月せ〻まぐ敵色たりぐふ
大まるぐさ義くふ孔を攀とさして敗少すると遠くを
遠せど金をなり〻法華と悔めて秀茶ハ龍岳寺を
禅月とたり島山ら首とのりく塞ふうまぐ
河乃遠ざると変ぐてまとく軍師と名る敵〻之婦が働さを

賞ぐづいて美者るゆもひうんゆく行候と申につゝ〻
都動と紛せ〻れた京都と姫る近必行とく和漢〻孔云方る
再び討ひと美河乃九隠る〻く〻侵ふ者色〻ハ山寒部ゆて
事なく尚と銭賊を集め兵糧と積く武備厳重うて
法令と正一寺とハ小しと美心と生ずる者るく神祠ゆて抱て
妓女数十人ハ親里よ帰〻んとも思ふ若ハ涙〻ぐる若ハ文くよ
配偶して上不能和一治う寺る禅月ハ已よ山堂ふ加るゆ世よ
著〻ふべ寺よ帰〻ぐ山塞の侍人別よ居宅と建設〻寺に
祈き〻法華とちぐく招き寄て塞中ゆ仏事と執行
めこゆ文学射御の術そ〻く〻り秀〻若と師とる〻〻
法華勤〻習ふ事急〻ぐ波治工西ふいるまぐ悪

備らびにくいるるをく見と迫ひく勝ひ登こそ又てうり名

正月吉日 新板

京寺町通こ条上ル町

菊屋安兵衛板

5年10月

備らばとくいるるを以日を選びて謹しみ整こそ是てうるる

天明三年正月吉日 新板

書肆 京寺町通二条上ル町 菊屋安兵衛板